生徒とのふれあい⑨

おむすび握って生徒を応援

谷内純一

私は椿原高校へ新採用で赴任して2年目、廣瀬和子さん、時久純雄さんの二人は新採一年目でした。定期テストになったので夜、寮の食堂で三人で寮生のために夜食用のお結びを握っていました。寮は木造家屋で食堂のすぐ隣にあり、一階は男子寮、2階は女子寮でした。

お結びは9時ごろ全員に二つずつ渡します。生徒たちに、頑張ってよい成績をとってもらおうと、三人で楽しく談笑しながら、慣れない手つきで三角に握っていました。

食堂のガラス戸がガラガラと開いて、農業科のTくんが入ってきました。なんだろうといっせいにT君の方を見ますと、T君は「先生らぁ、やかましゅうて、勉強できんじゃいか。」と大声で怒鳴りました。もっともな抗議に私たちはシャンピリ。あとはひそひそと話しながらお結びをにぎりつづけました。

T君たちが卒業して五十二年目、彼らが七十歳の時に初めての同窓会が普通科、農業科合同で椿原町で開かれました。私はTくんに会えるのも楽しみに出席しました。

ところが、Tくんの姿が見えません。なんとT君は亡くなっていたのでした。私はがっかりしました。私ががっかりした訳を聞き知った幹事の女性は「そんなに懐かしく覚えていてもらえるんだったら、私も何かで先生を叱っておいたらよかった。」と言いました。

同窓会には廣瀬和子さん、仮谷仁さん、尾崎之治さんが事情で参加できず、（時久純雄さんは故人）残念でしたが、楽しい同窓会でした。

なお、その後もテストのときは三人でお結びを握り続けました。そのせいでしょうか「お結びをきれいな三角形に握ることだけはかなわない。」と家内が言っています。

浄玻璃鏡で妻に叱られたこと

土居　修

六十四年の来し方を振り返り、優れて誠実な人生、見事であるとおのれを褒めながら焼酎を飲んだ。性悪説に従い「学問によって欲望や快楽などの煩悩に流されやすい弱点を克服し、礼節をもって生きる」ことを信条として歩いてきた歳月が愛おしく、したたかに酔ってしまった。

「飲み過ぎじゃないの」と二階から降りてきた妻に叱られた。御一人様の静かな如月の深更であったはずなのにと釈然としないままに、妻の背中を見つめていると、人生の折節に友人に与えた悲しみの少なくないことに慄然とした。学問が浅かったのだろうか。

たとえば、十代の荒ぶる魂を鎮めるためにSに仕向けた非道な仕打ち。東京での青春を笑い話にしようとしてKに巡らした数々の姦計。Aは楽観的でなにをされようともすべてを笑い飛ばすことのできる稀有な男であった。だからこそ、彼には容赦がなかったといってよい。

こうした悪行が露見すれば、見事であるはずの私の人生が泥にまみれてしまう。誠実であった人生は誠実なままに閉じねばならない。如何にして覆い隠すかと考えていたら、不意に相田みつを（詩人・書家）のことばが思い浮かんできた。「浄玻璃の／鏡の前に立つまでは／秘めておきたし／あのことも／このことも」

いのちのある限り、そして、死しても34日間はなんとしても隠し通さなければならないというのである。翌日には浄玻璃の鏡におのれの運命をゆだねるしかないことを知りつつも、そう願う相田みつをになぜか親近感が湧いてきた。

生前に人に与えた「喜び」と「悲しみ」を浄玻璃鏡は映し出す。それによって閻魔大王が処断するという。前者が多ければ天国。後者が多ければ地獄へ。財産があろうが、社会的地位が高かろうが全く関係ない。功績や美しい思い出さえも切り捨てられる。逃れる術（すべ）はない。

かなしいかな、私は地獄に行かねばならないのか。覚えず、酔いが回ってきた。ふらつきながらも台所に立ち、あらたな一杯を追加。

翌朝、屈託のない微笑を浮かべてのんきに珈琲を飲んでいる妻に、地獄行きが予定されているらしいことを告げた。

「自業自得じゃないの」と妻。

言われてみれば、そうかもしれないと思った。だが、相田みつおには気の毒だが、私には勝算がある。私は閻魔大王に対してすべての悪行は他者に唆されたという経緯を説明することができる。多彩な形容詞と多様な形容動詞を縦横自在に駆使して弁明しよう。頓智を働かす自信もある。相応の知略も備えているとの自負。それでもって閻魔大王を屈服させてみせる。珈琲の色あいを詩情を込めて琥珀色というが、その朝の珈琲は紛うことなき琥珀の色であった。

しかしながら、と不安にもなった。屈服させることができなければどうするか。善行を重ねながら生きていくしかない。それをもって相殺していただこう。我ながら卓越した才覚であると自賛した記憶。

「身勝手な男ね、まったく。けど、もう遅いんじゃないの」

叱られたのか、叱られなかったのか。いずれにしても、つれない返事。私が地獄に落ちることに何の感慨も湧かないのか。少しくらいの協働をしてくれてもいいのではないか。いっしか珈琲が苦くなっていた。顔をしかめる私に妻がささやいた。

「八年前のお父さんの葬儀の日にご住職が語ったことばを覚えちゅう」

覚えてないと応じると、閻魔大王の裁きの日に親族や縁者が追善供養をすると、善行が浄玻璃鏡に映し出され、その功徳の深さによって、天上界（最上の果報を受ける者が住む清浄な世界）に送られると仰っていたじゃないのと説明してくれた。

思わず、快哉を叫んだ。きわめて壮麗に賑やかに追善の供養をしてもらうしかないな、文句なしの妙案。

「そのときには、よろしく頼むね」

殊勝な面持ちでお願いしつつも、こみ上げてくる笑いは如何ともし難かった。

「してやってもいいけど。でも、これまで善行をしたことがあるの」

素っ気ない返事。それだけではなかった。さらに「善行ってどういうことかも知らないくせに」と叱られた。

「善行はしているじゃないか」と胸を張って反論。

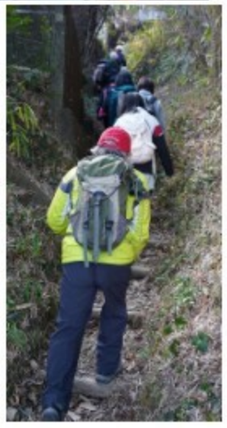
昨年のクリスマス・イブ。高退協事務局のみなさまに私の秀麗な句が印字された「おーいお茶」をプレゼントしている。それが県内で販売されるかどうか、定かではない。希少なペットボトルを贈るという行為はまぎれもなく善行であろう。

「それが、善行なの」

「そうだよ」

「日ごろからお世話になっているみなさまへの感謝は、善行とはいわないんじゃない」

俺が善行だと思えば善行なんだよとおのれに言い聞かせながら、今宵もまた酔うしかなかった。

浄玻璃の
鏡のまえに
立つまでは
秘めておきたし
あのことも
このことも
おつま

新春初歩き 楽しいひととき